

「男、突っ走る！」

第28回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

高倉	高倉	高倉	尾形	木内	木内	木内	木内
梢	代久	直久	安代	健次郎	真保	孝志	雅也
(47)	(72)	(77)	(54)	(14)	(45)	(47)	(18)
真保の姉、 雅也の伯母	真保の母、 雅也の祖母	真保の父、 雅也の祖父	中央高校3年2組担任	雅也の弟	雅也の母	雅也の父	中央高校3年2組生徒

1 中央高校・廊下

封筒を持った雅也が歩いている。

2 同・職員室

安代他、職員たちが仕事をしている――

――雅也が入ってくる。

雅也「失礼します。（と安代の席に来ると）

安代先生」

安代「あら、木内君どうしたの？」

雅也「（封筒から書類を出す）先生、専門学校、合格しました」

安代「本当ッ!? それは、おめでとう。嬉しい報告ありがとう」

雅也「これで、思い残すことなく、検定勉強に専念できます」

安代「入沢先生から聞いてるわ。ITパスポートと、情報処理検定一級受けるんだって？」

雅也「はい」

安代「進路が決まって、少し肩の荷が下りた

んじゃないかしら」

雅也「そうだと思います。これまで、先が見えない中で脚本を書きながら検定勉強をやってたので、正直落ち着かないこともあったんです。でも今考えたら、専門学校の面接やITパスポート、情報処理検定って、ずっと受験ばっかりしてますね。（と笑うと）まあこれで、情報活用コースらしく、最後に万全の体制で検定を受けようと思います」

安代「入沢先生からも松野先生からも、木内君が検定勉強を本当に頑張ってるって話は聞いてるわ。無事に検定に合格できるように、応援してるから」

雅也「はい、ありがとうございます」

笑顔で頷く安代。

### 3 線路を走る電車

N「専門学校から合格通知が届いて間もなく、学校では二学期が終わり、高校生活最後の

冬休みに突入しました。そして、冬休みに入って翌日のこと。僕は、母と共に母の実家である岐阜の祖父母と伯母のもとを訪ねていきました。母の実家は、長年豆腐屋を営んでいる自営業で、祖父は中学卒業から約六十年近く、豆腐屋一筋でやってきた、いわば職人なのです。思えば、僕が脚本家という専門的な職に就きたいというのは、この遺伝なのかもしれません」

#### 4 駅・ホーム

電車が止まり、真保と雅也が下りてくる。

#### 5 高倉家・玄関

高倉家は真保の実家であり、住宅街の一角にある、トタン張りの昔ながらの和風建築の家である。母屋の隣には豆腐屋の工場があり、業務用の冷蔵庫や袋詰めの機械、運搬用のタッパー等が

置かれている。

真保の母・高倉文代（72）が、工場の中二階にあるベランダで、洗濯物を干している——真保と雅也がやってくる。

雅也「ばあちゃん、来たよ」

真保「母さん、今着いたよ」

文代「（階段を下りてきて）待ってたわ。

（と工場に向かって）おじいさん、真保と

雅が来ましたよ」

と、真保の父・直久（77）が出てくると、

直久「おお、着いたか。まあ、上がれや」

お互い顔を見合わせて頷く雅也と真保。

## 6 同・ダイニングキッチン

真保の姉・梢（47）が食器を洗っている——裏の勝手口から、直久、文代、真保、雅也が入ってくる。

直久「梢、真保と雅が着いたぞ」

真保「ただいま」

雅也「こんにちは」

梢「こんにちは。雅君、しばらく見ないうちに大きくなったわね」

真保「高校三年だからね」

梢「もうそんなになったんだ。そりゃそうか。うちの亮一が社会人一年目で、祐介が大学三年だもんね」

直久「おい、ロールケーキあっただろ。出してやれや」

梢「はいはい（と支度をする）」

直久、ソファーに座ると、

直久「ばあさんから話は聞いた。雅、お前専門学校に行くんだって？」

雅也「うん」

直久「どんな仕事に就いても、まずは金稼がんことには何にも始まんからな。ちゃんど手に職つけんと、おまんまの食い上げだ」

文代「雅はもう高校生なんですよ、そんなこと言われなくても分かかってるでしょ」

直久「俺はな、中学卒業して、すぐに豆腐屋を継いだ。高校にも行ってない。だからな、勉強ができるうちは、ちゃんと勉強しとけ。頭を良くしろとは言わんが、社会に通じるように、ましてや専門学校に行くんだったら、ちゃんと手に職つけるつもりにならんとな」

雅也「分かってる。だから、専門学校に行きたいって決めたの」

と、梢がロールケーキに乗せた皿とコ―ヒーを運んでくると、

梢「雅君は、どんな学校に行きたいの？」

と、パンフレットを一同に見せる雅也。

雅也「この学校」

梢「名古屋芸術専門学校？　どんな学校なの？」

雅也「ざっくり言うと、デザイン系の学校なんだけど、その中でもこのシナリオライター専攻っていう学部があるから、ここを受験したの」

梢「シナリオライターってことは、雅君は作家になりたいの？」

雅也「脚本家になりたいと思って、これまで自分で脚本書いて、事務所とかに応募もしてきた。でもなかなか良い返事はもらえなくて、技術力が足りないって気づいたから、ちゃんと一から専門学校で学びたいって思ったの」

直久「お前は新聞記者にでもなるのか？」

梢「違うっておじいさん、脚本家だって」

直久「新聞記者とどう違うんだ？」

真保「簡単に言うと、テレビドラマの台本を書く仕事のこと。ほら、倉本聡とか山田太一とか、あとお母さんがよく見てたドラマの脚本書いてた橋田壽賀子とか」

直久「芸能の仕事に就くってことか？」

雅也「まあ簡単に言えば、そういうことになるよね。ドラマの台本を書いて、それを俳優さんが演じるわけだから」

直久「お前が行きたいっていう学校で、専門

的なことを学んだら、その道に行けるって  
いうのか？」

雅也「各業界とのつながりがしつかりしてる  
学校なの。実際、在学中に作家や漫画家と  
してデビューした学生もいるみたいだし」  
文代「じゃあ、ただ授業受けるだけじゃなく  
て、そうやって自分で何か作品を作ってい  
かないといけないってことね」

雅也「そりゃ、授業受けただけで仕事が決ま  
れば誰だって苦労しないよ。だからこそ、  
授業で学んだことをちゃんと生かして、デ  
ビュー活動とか就職活動に役立てようと思  
ってるの」

梢「でも、必ずしも専門学校に行ったから専  
門的な仕事に就けるとは限らないんでし  
よ？」

雅也「それは本人次第だろうね。当然学校に  
来る求人は様々だろうし、専門学校で学ん  
だことを生かせないまま、普通の仕事に就  
く人だっていると思う」

梢「それじゃあ、何のためにその学校に通ってたのか分からないわね」

真保「業界就職率は確かに九十パーセント超えてるけど、残りの十パーセントは一般職らしいからね」

直久「お前がその学校に入って、ちゃんと専門的な仕事に就けるんだったら良いが、その保証もないんだろ」

雅也「……」

梢「でも雅君は、元々脚本家になりたいっていう夢があって、それを叶えるためにまずは専門的なことを勉強しようと思って、この学校に入りたいでしょ」

雅也「うん」

直久「いくら夢を持ってたって、現実はその甘いもんじゃないんだぞ。自分の腕一本でおまんまを食べることは大変なことなんだ」

雅也「……」

真保「……」

文代「……」

梢「……」

直久「それでも、雅は文章を書く仕事に就きたいのか？」

雅也「うん。就職活動のつもりで、ひたすら作品書いて、いろんな事務所に送った。それでも、結果は全部ダメだった。でも、ここで終わりたくないの。もっと専門的に学んで、ちゃんと世間で通じるような脚本を書けるになりたいって思ったから、その専門学校で面接試験を受けた。その学校に入った以上は、三年間ひたすら専門的な知識を身に付けて、ちゃんと学校に行った甲斐があったように、それからの進路を決めていく」

直久「……」

雅也「じいちゃんと一緒に、いわば俺も文章を書く職人になる。腕一本でやっていくために、職人になるために、その学校で学びたいの」

真保「……」

直久「そうか……」

と、文代に目配せをする直久——文代、  
頷くと真保に手招きをして、奥へ行く。  
訝しそうな顔の雅也。

7 同・和室

真保に封筒を渡す文代。

文代「これ、あんたが相談してきた、入学金  
と一年間分の授業料よ」

真保「母さん……」

文代「ずっと子どもだと思ってた雅が、今回  
久しぶりにうちに遊びに来て、おじいさん  
とどんな話をするかと思ったら、すっかり  
大人びて、真面目な話をするようになった  
のね」

真保「……」

文代「孝志君が福岡に行ってる間に、父親代  
わりとして、あんたと一緒に家を守ってた  
からっていうのもあるかもしれないわね。」

七年間も父親が不在なんて、あの子や健にとっては何れほど心細いことだったか。それでも弱い顔も見せずにこれまでやってきたんだもの、これからも大丈夫よ、雅だったら」

真保「私も。今日、あの子が父さんとどんな話をするんだろうかと思ってたのよ。豆腐屋一本でやってきた父さんとは、全く違う世界の話だから、説明するのにも大変だったと思う。それでも、あの子なりにこれかはどうしていききたいのか、ちゃんと説明できたんじゃないかしら」

文代「そうね。私も、今日それを見届けることができたから、ホッとしてるわ」

真保「（封筒を受け取ると）母さん、本当にありがとう」

文代「お礼なら、おじいさんに言いなさい。このお金は、おじいさんが仕事で稼いだお金なんだから」

真保「うん……」

大切そうに封筒を鞆にしまう真保。

8 同・ダイニングキッチン（夕）

帰る支度をしている真保と雅也——見  
送る文代と梢。新聞を読んだままの直  
久。

真保「じゃあ、これで」

文代「そっち戻ったら、電話して」

真保「分かった」

梢「買い物行くもんで、途中の駅まで、送っ  
てくわ」

真保「ありがとう」

雅也「（直久に）じいちゃん、ありがとう。  
帰るね」

と、ドアを開ける。

直久「（新聞を読んだまま）雅」

雅也「……？」

直久「（新聞を読んだまま）頑張れよ」

雅也「うん……」

直久「……」

文代「……」

梢「……」

真保「じゃあね、父さん」

と、出ていく真保、雅也、梢——見送る文代。

文代「雅がこれから、どういうに成長するか楽しみですね」

黙ったまま新聞を読んでいる直久。

## 9 街を走る車

### 10 その乗用車の中

梢が運転しており、後部座席に座っている雅也と真保。

梢「おじいさん説得するのも楽じゃないわ」

真保「そうだね」

雅也「……」

梢「私もさ、亮一と祐介の大学行かせるときに、おじいさんに相談したんだけどさ、今回みたいなこと聞いてくるんだわ。その大

学行って、ちゃんと就職できるのかとかさ、何かあるたびに、ちゃんとした職に就かないとおまんまの食い上げだって、そればかり言うんだから」

真保「豆腐屋一本でやってきたんだもん。私もお姉ちゃんも、高校卒業してすぐに就職したからそういうことは言われなかったけど、孫たちの代がみんな進学するって話になったら、なおのこと心配するんじゃないかな」

梢「それでも、雅君よくおじいさんと話せたわ。分からない業界のことなんて、余計に不安になるから、おじいさん何言い出すんだろうって、伯母ちゃん冷や冷やしてたもん」

雅也「確かに、脚本家になるっていきなり言っても、じいちゃんには理解してもらえないって思った。けど、専門学校で何を学んで、自分がこれからどんなことをしたいのかを、素直に自分の言葉で伝えようって

思ってたから」

梢「まあ、せつかく通う専門学校なんだから、学校生活は楽しんでね。多分、専門学校の中でしか作れない思い出だってあると思うから」

大きく頷く雅也。

11 木内家・居間（夜）

孝志が夕飯の支度をしている――テレビを見ている健次郎。

健次郎「お腹空いた」

孝志「もうすぐできるからな」

と、雅也と真保が帰宅する。

雅也「ただいま」

真保「ただいま」

健次郎「おかえり」

孝志「おかえり。もうすぐで夕飯できるからな」

真保、孝志のもとへ行くと、

真保「母さんから、入学金もらってきた」

孝志「そうか」

真保「父さん説得するの大変だったけど、雅が何とか自分の言葉で説明できたから、良かったと思うわ。あんたからも、また父さんにお礼の連絡しといて」

孝志「分かった」

12 高倉家・工場（数日後）

直久が大豆を洗っている——文代が油揚げの支度をしている。と、電話が鳴り、文代が電話に出る。

文代「はい、高倉食品です。ああ、孝志さん。ご無沙汰してます。無事に福岡から戻ってきましたみたいで。今度は、健も連れて四人で遊びに来てくださいね。え、おじいさん？ いますよ、変わりましたよ。 （と直久に）孝志さんから」

直久「（受話器を受け取り）もしもし。おお、久しぶりだな、孝志君。え？ まあ、良いってことだ。孫のためにしてやれるうちが

華だからな。雅も真剣に進路を考えて、専門学校に行きたいって決めたんだ。何、そんなこと気にすることはないさ。あのお金は貸したんじゃない、孫への合格祝いってことでプレゼントしたんだから。これで、雅が自分の道を切り開いてくれるってこと考えたら、安いもんだ。ああ、真保のこともよろしく頼むよ。じゃあ、また。ありがとな。(と電話を切ると) 普段連絡なんてしてこない人から電話が来ると、何事かと思うよな」

文代「真保が言ったんでしょ。孝志さんからもお礼を言うようになって」

直久「まあ、あいつらしいよな」

文代「これで雅が、ちゃんと目標に向かって頑張ってくれると良いですね」

直久「そうだな」

直久を見て微笑む文代。

雅也が検定勉強をしている――ノック音がして、真保が入ってくる。

真保「検定勉強？」

雅也「うん。もう試験まで一ヶ月もないからね。大晦日と元日以外は、検定勉強に専念しようと思ってる」

真保「今日、銀行行って、入学金と授業料、入金してきた」

雅也「そう……ありがとう」

真保「もう、後戻りはできないからね」

雅也「分かってる。高い学費だからこそ、元を取れるように、三年間頑張る」

真保「名古屋まで通うのは大変かもしれないけど、大丈夫よね？」

雅也「うん。脚本家になるためだったら、電車通学ぐらい大丈夫」

真保「今もそうだけど、無理はしちゃダメよ。何かに専念すると、あんたは根詰めることが多いから」

雅也「分かってる。無理しない程度にするか

「ら

真保「もうすぐご飯よ。できたら呼ぶわ」

雅也「うん」

と、出ていく真保——再び試験勉強を始める雅也。

N「合格通知が届き、授業料を入金したという話を聞くと、改めて自分の中で専門学校という新しい生活がすぐそこまで来ているような気がして、期待に胸を膨らませていました。それと同時に、まもなく高校卒業という時期を迎えることを考えると寂しい気持ちもあつたのでした」

つづく